

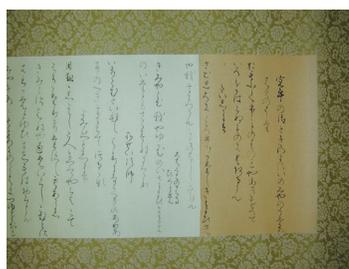
図書館報

81号

平成20年11月20日発行

目次

- 2 **巻頭言** 「図書館司書教諭講習」を終えて
附属図書館釧路館長 石井由紀夫
- 3 **寄稿** 大学図書館における美術作品の展示
教育学研究科美術教育専修 大崎 紗代
- 4 **特集** 選書ツアーレポート
- 7 世界へ発信！北海道教育大学学術リポジトリ
- 8 附属図書館からのお知らせ



「花野」「雲」「臨張遷碑」
「臨関戸本古今集」



- 2008年5月中旬～7月上旬に札幌館にて芸術文化課程美術コース油彩研究室の作品12点を展示。
- 2008年7月中旬～8月末まで札幌館にて書道研究室の作品8点展示。

「図書館司書教諭講習」を終えて

附属図書館釧路館長 石井 由紀夫

今年の7月25日から8月16日にかけて、釧路校で「図書館司書教諭講習」が開設されました。受講生は全員で37名と、全盛期に較べればささやかな規模となりましたが、以前よりこの講習で講師をしていた私にとっては、この程度の規模の方が受講生一人一人の気持ちが伝わってくるようで、話しやすかったように思います。私の担当は、「読書と豊かな人間性」という少々わかりにくい講座でしたが、そこは専門の日本文学を中心に、古代からの読書形態の変化や作者意識の問題、そして現代の読者論や読書の可能性について話させていただき、4日間の講座を修了することになりました。その折に、単位レポートの代替えとして、受講生から自己の読書体験について書いてもらいました。それを読みながら、考えさせられることが多少ありましたので、ここではそれについて少し書いてみたいと思います。

私の講座の受講生は、社会人・現職教員11名と学生12名の併せて23名でした。その中で一番多かった読書体験は「読み聞かせ」であり、10人の受講生（うち8名は学生）が挙げています。多くの方が、両親とくに母親からの「読み聞かせ」を挙げており、幼少期や小学校時代の「読み聞かせ」の体験が、成人後の読書に大きな影響を与えているようです。そこで、学校図書館の役割として、「読み聞かせ」をもっと導入するべきではないのだろうかと考えてみました。確かに、図書館司書教諭の先生方は、クラスを持ち、全教科の授業も担当しなければならないわけであり、そんな時間はないと言われるのかも知れませんが、例えば釧路校で実施している学校ボランティアの活用や、土曜日の学校開放の企画として、先生方の無理のない実施のやり方を模索することは可能ではないでしょうか。教育大学の附属図書館のあり方として

も、館内の静寂だけを問題にするのではなく、「読み聞かせ」に繋がる「朗読サークル」のようなものを積極的に支援してはどうでしょうか。

他にも、私と年齢が近い方々の読書体験には、私自身の高校時代の読書体験と繋がるものを感じられて、懐かしい思い出に満たされました。大江健三郎・三浦綾子や山崎豊子など、いずれ退職したときには、ゆっくり読み返してみたい作家達の名前です。大学で私の人生を決めた作品である『平家物語』や『太平記』に出会った時の気持ちは、今でも忘れることはありません。大学へ行けば、講義にも出ずにまっすぐ大学図書館へ行き、毎日『平家物語』や『太平記』に関する様々な本を読み漁っていた日々は、私にとって忘れられない青春の一頁でした。知へのあくなき探究とその喜び、今の自分には失われつつあるその思いを、私に教えてくれたのも大学図書館でした。このような大学図書館の本来の使命と思われることを私に思い出させ、これからどうやって若い学生さん達に伝えて行ければいいのかを考えさせてくれたのも、この「図書館司書教諭講習」であったように思います。

これからも、これらの体験を活かせるように、釧路館長の仕事に精励していきたくと思っています。

寄稿

大学図書館における美術作品の展示

大崎 紗代

美術作品の展示、と聞いて思い浮かべる空間はどのような場所だろうか。おそらく、美術館やギャラリーと呼ばれる美術の作品を展示する場所を思い浮かべる人が多いだろう。カフェや喫茶店に作品を飾り、そこに立ち寄ったお客様に作品を鑑賞してもらうことや、今日では自然の一部を作品に用いてそこにある場所や空間全体を作品とし、それ自体を鑑賞者に体験してもらう（インスタレーション）という作品の展示方法もある。

前者に述べたギャラリーや美術館に来る人は、美術に興味をもっている人がほとんどである。また、それらの空間はどこか敷居の高いものと考えられることが多く、そこにある作品までもが日常の生活とはかけ離れた遠い存在ととらえられているように思われる。大学図書館は、学生がよく訪れる場所のひとつである。そこに作品を展示することにより、多くの学生に作品を見てもらう機会となる。日常生活の中でもっと美術を目にし、感じる機会が増えれば、美術＝敷居の高いものという認識は徐々に減らせるのではないだろうか。

今回、大学図書館から美術コース油彩研究室に作品展示の依頼があり、作品展示を希望する学生が集った。大学図書館には、当然図書を利用しに来る人たちが足を運ぶ。そこに作品を展示することは、利用しに来た人が作品に出会う場合がほとんどである。その偶然から作品に興味をもってもらえれば、作品を創作する者として大変嬉しいものである。

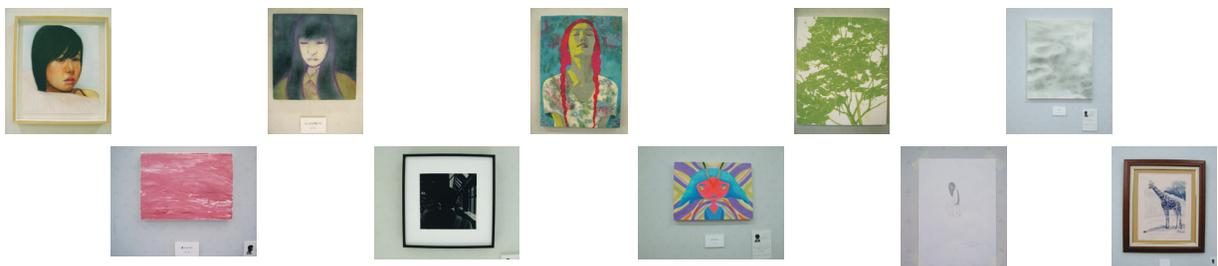
図書館の白い壁に作品を展示し、出品者の作品を見渡す。普段研究室内で作品を見ているのと、別の場所で作品を見るのとでは、その表情が全く違う。いつもと異なるその表情と図書館の広い空

間にわくわくした。

今回の展示作品についてアンケートを行ったところ、「普段美術作品を見る機会がないので、今回の展示で作品を見ることができてよかった」「図書館の雰囲気がよくなった」という意見が多く、これからの創作活動にとっても励みになった。しかし、「展示が自習の机と近すぎて見にくい」との意見もあり、今後図書館で展示を行う際に心がけていきたいと思った。アンケートで最も印象に残ったのは、「美術コースの存在を思い出し、素敵な絵を描ける人たちが身近にいたのだと思いました。」という3年生からの回答内容だった。現在、札幌校に美術コースは4年生以上しか在籍していない。美術コースの私たちが他の学部と何かを共有することは、ますます少なくなっている。私たち学生は、他学科がどのような研究を行っているのか、ということを知らずに過ごしている。私は美術以外の世界を見聞きし、他学科で研究を行っている学生の話を知ると、はっとすることがある。自分の知らない世界がたくさんあるのだと強く感じる。一見全く異なるような分野の研究がどこかで美術と共通している気がするなど、出会いと発見がおもしろい。私たちは毎日が様々なことを感じ取り、吸収している。

今回の作品展示を通して、多くの人たちが美術に対してますます興味をもち、芸術を身近に感じてもらうきっかけとなれたなら大変嬉しいことである。

(おおさきさよ・教育学研究科
美術教育専修 (西洋画))





選書ツアーレポート

附属図書館(札幌館)では、学生の皆さんに、読みたい本や図書館に置いて欲しい本を直接書店で選んでもらう学生選書ツアーを実施しました。5名の学生の方が参加し、42冊の本を選んできました。参加した感想と選んだ本の推薦文を紹介します。

■実施日時 2008年6月13日

■場 所 紀伊国屋書店札幌本店

■自分が本を選ぶ主体に

選書ツアーに参加して、多くの書物に触れ、実際にこの目で内容を確認することができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。選書のために与えられた時間も丁度よかったと思います。大学生にとって本を買うことは容易ではありません。ですから図書館の本を大学生の興味・関心に合わせた本とすることは、大学生を経済的に助けていることになります。来年も選書ツアーを実施して出来るだけ多くの学生が、本を選ぶ主体になることを期待します。参加させていただいて大変嬉しく思っております。ありがとうございました。

おすすめ

アフリカ：苦悩する大陸

ロバート・ゲスト著 東洋経済新報社 2008年

“どうしてアフリカの国の多くは貧しいのだろうか”

“貧しい国々はどうすれば豊かになるのか”

これらの疑問を抱いたことのある方にオススメするのが本書です。『エコノミスト』特派員として7年間アフリカ取材した著者がアフリカの諸問題—民族対立、貧困、HIV/AIDS、腐敗した政府など—について著者の体験を混じえ語ります。

人類が消えた世界

アラン・ワイズマン著 早川書房 2008年

本書は、未来を考えるための新しい視点を読者に提供してくれます。「いま人類が忽然と姿を消したら、世界各地では、いったい何が起こるのか。」という著者の疑問の下、さまざまな科学的知見にもとづいて、驚愕の未来像が描きあげられています。数百年後、数千年後、はたまた数千万年後にこの地球に残る人類の営みの産物は何なのか。本書を読んでいると私たちが現在抱えている環境問題についても深く考えさせられるでしょう。

■より活用できる図書館を

普段は、本を買いたいと思いつつも、欲しい本をなかなか買えない中で、バーコードの読み取りではありましたが、実際に欲しい本をどんどん買えるような感覚で、まずは純粹にとっても楽しかったです。こういった企画があることで、図書館が単なる勉強場所ではなく、学生の関心が高まり、より活用できる図書館ができると感じました。今回は、参加させていただき本当にありがとうございました。また機会があれば、参加したいです。

おすすめ

状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加

ジョン・レイヴ、エイエンヌ・ウェンガー著

産業図書 1995年

この本は、人がある共同体に参加し始めたときから、その活動に本格的に関わっていくまでの過程とその条件について書いてあります。身近なところで考えれば、私たちの所属するサークルに、なかなか出てこない人がいて困っているときなどは、そのサークルのやり方に何が足りないのかのヒントを見つけることができます。ぜひ、身近なこととつなげて読むことをお勧めしたいです。





NPOと社会教育

日本社会教育学会編 東洋館出版社 2007年

私たちの周りにも学生NPOなどに所属している人も数が増えてきたのではないかと考えています。いままで社会問題の解決を担ってきた「国」や「市場」に加えて、新たに「市民社会」の役割が大きくなっています。NPOもまた市民団体のひとつです。そんなNPOがこれまでの地域社会とどのような関連構造をもつのか、社会教育の研究者たちがさまざまな視点から論じています。何か市民活動に参加するとき、参加することとともに、現代社会におけるその意味も考えられたらいいと思って推薦します。

生涯学習の教育学：学習ネットワークから 鈴木敏正著 北樹出版 2004年

生涯学習という言葉が近年よく耳にします。生涯学習のまちづくりなども盛んに聞かれる言葉の一つではないでしょうか。現代社会の新自由主義の中で展開する生涯学習を社会教育の視点から批判的に読み解き、その本来の姿を国際的な文書の傾向とそれと共通の理念をもつ戦後日本の社会教育の豊かな蓄積から、今後あるべき生涯学習の姿を模索しています。学校教育に加えて、より広い視野で教育というものを考えてみるができる本書をお勧めしたいと思います。

■もっと多くの学生に参加してほしい

今回の選書ツアーに参加させて頂きありがとうございました。実際に書店で本を手にとって選ぶ作業はとても楽しく、時間ぎりぎりまで本選びに没頭してしまいました。紀伊国屋本店は多種多様な本が多く選書ツアーには最適な環境でしたし、街の中心部にあるので参加しやすい場所にあると思います。当日選書ツアーに参加した学生の数が

少なかったのが残念でしたが、自分で本を選ぶ作業は興味深い体験だったので、今後も多くの学生が参加するとういなと思いました。

おすすめ

1歳から100歳の夢

日本ドリームプロジェクト編 いろは出版 2006年

あなたの夢はなんですか？こう質問されて、即答できる人がいるなら、私はその人が羨ましい。この本には、1歳から100歳までの100人の夢がつまっています。100人が綴る大小さまざまな夢。夢を語る姿に、その笑顔に、なぜだか元気をもらえる気がする。いつの間にか、夢をみていない自分に気づくし、自分の可能性を制限してもいけないということがわかる。夢を持っている人は、とてもいい顔をしている。100人の夢を読んだら、たぶん共感できる夢が見つかることでしょう。そして、人の夢をこんなに集めた本に心がワクワクするはずです。

してみたい！世界一周

吉田友和, 松岡絵里著 情報センター出版局 2006年

海外旅行へ行くことが特別な時代じゃなくなった今、世界一周という夢を実現している旅人たちがいる。世界一周する旅人と聞くと、いっけん変わった人たちなんじゃないかと思われるかもしれないが、この本で紹介されている旅人たちはいたって普通の人々だ。旅に出る前は、普通に学生をしていて、普通に勤め人だったのだ。いわゆる一般向けの海外旅行のパックツアーでは飽き足らず、自分でルートを決めて好きな宿に泊まり、ビザだって現地取得が当たり前のような、半分行き当たりばったりの旅の中で、何を思うか、何をするかは自由だ。世界の大自然を巡る旅、世界の祭りを巡る旅、聖地を巡る旅…どんな所を巡るかは、まさに自分



次第！旅のプランを考えるだけでも面白いので、この本を読みながら、旅に出ている自分を想像することができます。本当に行きたくなったら、本を閉じて後は自分で情報収集しましょう。旅に出るのに、年齢制限なんてない。学生でも、社会人でも、行きたい時に一歩外の世界に飛び出してみる勇氣があれば、今まで知らなかった世界を見ることができるのだと感じた。ちなみに、この本で紹介されている旅人たちは世界一周から帰国した後、皆しっかり働いています。いろんな生き方があるんだなあと教えてくれる本です。旅が好きな人、必見です！

■新鮮！楽しかった本選び

図書館に置く本を自分で手にとって選ぶというのが、とても新鮮でした。既に有るものだけでなく、自分に必要な資料を集めるという点でももっと図書館を利用できるのかなという気がしました。本を選ぶってどうすればいいのかなと思っていたのですが、実際に行ってみると読みたいと思うものがたくさんあり、楽しく選ばせてもらえました。

おすすめ

漢詩の歴史：古代歌謡から清末革命詩まで 宇野直人著 東方書店 2005年

先秦時代から辛亥革命期までの中国の伝統詩、いわゆる漢詩の変化・発展のありさまを実際の作例に照らしながら辿ったものです。各詩人の代表作や詩史上の事件だけでなく、各個人の個性や作品の魅力にもスポットを当てて、新しい見方が盛り込まれています。たくさんの詩が実際に引用されており、時代や個人の特徴を明らかにしています。

日本の諺・中国の諺：両国の文化の違いを知る 陳力衛著 明治書院 2008年

この本は、異文化交流の視点から、日本独自の諺がどのように生まれどのように変容したのか、また、中国由来の諺がどのように日本語で受容されてきたかを解説しています。例えば、日本の「石の上にも三年」は忍耐強さを強調する諺ですが、中国では同じ意味を表して「只要功夫深、鉄杵磨成針」、鉄の杵も日々磨き続ければ鋭利な針と成る、という言い方をします。同じ意味を持つ諺でも、静と動のイメージの違いが、日中の文化の違いでもあると指摘されています。



選書ツアーで選んでいただいた図書は、札幌館2階コピー機横の、「学生選書ツアーコーナー」に並べておりますので、どうぞご利用ください。

HUE Repository

世界へ発信！北海道教育大学学術リポジトリ

■ HUE Repository 公開

学術機関リポジトリ (Institutional Repository) とは、大学内で生産された学術論文等の研究成果を蓄積・保存し、インターネットを通じて世界に無償公開する電子アーカイブシステムです。

本学では2008年6月に「北海道教育大学学術リポジトリ (HUE Repository)」を試験公開し、サービスを開始しました。初期登録コンテンツは本学紀要に掲載された論文777件ですが、学術雑誌掲載論文や研究成果報告書、学位論文、学会発表資料、講義資料、教育実践資料等さまざまな研究成果を登録することができます。

■ オープン・アクセス運動

現在、世界各国で1,200以上、日本国内では80以上もの機関リポジトリが構築されており、その数はさらに増えていくでしょう。さて、機関リポジトリ誕生の背景には、1990年代以降のシリアルズ・クライシスがあります。少数の大手商業出版社によって学術情報の流通が独占され、価格の高騰等により研究者が学術情報を入手しにくくなっている危機的状況のことで、そうした中からオープン・アクセスという考えが生まれました。人類の共有財である学問成果に誰もが障壁なくアクセスできるべきという理念です。具体的な活動として機関リポジトリ構築や無料電子ジャーナルの発行等があります。

■ 機関リポジトリのメリット

さて、リポジトリに研究成果を登録するメリットとして以下の2点をあげたいと思います。

(1) 研究成果の効果的な発信が可能となる。

機関リポジトリに登録された研究成果は、Google等の検索エンジンを通じて無償で世界中のどこからでもアクセス可能になるので、経済的理由で購読できない研究者等より多くの読者獲得につながります。結果、その論文の被引用率の向上が期待されます。

また、学術機関にのみ配布されがちな紙媒体の報告書に比べて、インターネットでの情報発信には空間的・時間的制限がなく、研究者以外の一般市民、特に小中学校教員に対しても本学研究成果

を効率的に提供できるようになります。それは大学としての社会貢献につながります。

(2) 貴重な研究成果の電子的保存の場である。

本学リポジトリに登録された研究成果は永続的に保管されるので散逸を防ぐことができます。また個人のウェブサイトで公開する場合に比べサーバー管理の手間を省くことができます。

■ HUE Repository 充実のために

登録対象となる研究成果は学術論文だけではありません。学会発表資料や講義資料、教材、教育実践資料等、附属学校も含め大学の研究成果であれば全て登録できます。また、学術雑誌に掲載済の論文についても機関リポジトリでの公開を認める出版社が増えているので登録可能なものが多数あります。以下は著作権許諾状況を確認できるサイトです。

- SHERPA/RoMEO (海外)

<http://www.sherpa.ac.uk/romeo/>

- SCPJ (日本国内)

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/scpj/>

HUE Repositoryの充実には、教員や大学院生のみなさんのご協力が不可欠です。ぜひ研究成果をご提供ください。



<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/>

研究成果の提供やその他問い合わせは、学術情報室リポジトリ担当 (内線287、札幌キャンパス以外は51-287) にお願します。また上記サイトにも詳細情報を載せていますのでご覧ください。

